

博物館評価の勉強会

科学館プロジェクトリーダー 古田ゆかり

よいWSは時間を忘れてしまうほど楽しいものだが、ただ楽しいだけでは不十分だ。WSではその人が持っている知識から得られる以上のものは得られない。補完するためには知識が重要である。楽しいWSによって「もっと知りたい！」と学ぶことに積極的になれれば理想的だろう。

「二十一世紀の預言」は、WSのフォローとしてレクチャーを加えている。質疑応答しながら100年前の当時の様々な発見や情勢について説明したり、国や企業、大学の研究者からの未来予測アンケート結果を紹介している。このアンケートはそれなりにしっかりと取られているのだが、その内容には驚いてしまうものもある。ひどい例ではバイオテクノロジーで人間を小型化し、食べる量を減らすことで食糧危機に対応しようとか、地雷のみを分解するバクテリアを開発しようとか、脳機能の研究により犯罪を防止しようとか。WSをやってみると科学技術の問題にさほど詳しくない人でも、実現できないもの、実現によって次の問題を生んでしまうものをそれなりには理解することができるのだが、専門家は堂々と二十世紀の初頭の考えを踏襲していることが驚きである。すべてがこのような予測ばかりではないものの、アンケートに答えた人たちは今後の科学技術政策に影響力のある人たちなのだから困ってしまう。地雷除去バクテリアの開発に国費が投じられるようになってしまっただけでは目も当てられない。やることは他にあるはずだと思うのだが。

WSは受ける側はもちろんファシリテーターもなかなか楽しい。今まで工学系の大学、土曜講座のメンバー、環境教育NPOなどでやってきたが、それぞれ特徴があった。私自身がアウトサイダー的な考えを持つようになったから余計に感じるのかも知れないのだが、知識のある人ほど発想が固い。いつの間にか常識という枠組みにはまってしまふような印象を受ける。下手に知識がない方が柔軟な発想をするように感じるのは気のせいだろうか。

WS作成者が思ってもいなかった考え方が参加者によって提示されることもある。そういったリアクションがWSの面白いところだ。総合学習の場でもっとWS的な手法が取り入れられれば先生の、大人の予測を子どもたちの発想が凌駕することもあると思うのだが。アンチ総合学習の先生は、こうした学び方の面白さを知らなかったり、認められなかったりで却って可愛そうである。もっと自由になってよいのに。

これからも機会があれば「二十一世紀の預言」を行いたい。できれば次の発展形のプログラムを作ってみたいと考えている。科学技術が作り出す利益と被害の偏りや思想面について触れるようなWSを。しかし、いかんいかん、また総合学習から離れてしまうような気が……

資料を1冊ごっそりコピーするのは違法だけど、図書館のコピー機でそれをやった。雑誌1冊分。共犯者は私をもっとも信頼するUさんだ。コピーは資料の半分までなら可能なので、二人なら違法にならないと自分に言い聞かせた。昨年の夏のことである。

その雑誌の特集は、「博物館評価」という怪物がやってくる。やれやれ、「怪物」とは。

博物館評価は、博物館関係者の間では今とてもホットは話題であり、かつ、それまでの意識の大転換を求められる課題のようだ。「いま博物館は、運営側や作り手側による一方的な活動が多かったことを反省し、よりたくさんの人々に親しまれる博物館像を目指し、来館者や市民との対話を重視し、相互理解を深めるために、「評価」を組み込んだ活動を進めていこうと模索し始めています」とあるのは『博物館における評価と改善 スキルアップ講座資料集』（東京都江戸東京博物館実行委員会）の講座開催趣旨。要するに、財源は行政予算、「売り上げ」が低くても、来館者が少なくても、地域の支持を得ていなくても、「社会的な存在意義」と「あるはずの教育効果」によって存在していたいままでの姿勢をあらためなければならぬ、という意識が博物館当事者の中にも広がりつつある、ということのようだ。それが、「怪物」。博物館関係者の危機感が従来の姿勢とのコントラストによって際立つ、なかなかのコピーだ。

私たち科学館プロジェクトでも、「科学館」を評価しようと考えている。ただしそれは、私たちが実践しようとする科学館のあり方がどのくらい実在し、「市民」と「科学」が出会う「場」があるのかといったことに軸足がある。最終的には、教育効果や魅力的なコミュニティの在処であるとか、リピーターの多寡など、博物館関係者らが行っている評価軸を共通する部分は多くあっても、出発点や動機は少し違うように思われる。その思いにしたがって、昨年5月に私たちの評価軸（案）を作成した。しかしながら、我々の評価軸案をより説得力のあるものにブラッシュアップするためにも、なによりこのような活動を行う上で基本的には知っておかなければならない博物館評価の流れがどのようなものであるのか、私たちのプロジェクトの一員であり山梨県立科学館の学芸員でもある高橋真理子さんに講師をお願いして博物館評価に関する勉強会を行った。

評価の分類や切り口、来館者の視点を取り入れた評価の手法、展示を検証する視点など、幅広い視点からの評価の取り組みが紹介され、具体的な評価事例も話され、ここでも我々がするからこそ意味のある科学館評価とはどのような軸を持つべきなのか、という議論に発展させることができた。